The Molecular Biology Society of Japan
MBSJ NEWS
日本分子生物学会 会報
2007.11
No.88

目　次

■ 法人設立のご報告 ―― 1
■ 平成 20 年度（第 30 回）通常総会のご案内 ―― 1
■ 追悼文「内田久雄先生を悼む」 ―― 2
■ 第 30 回日本分子生物学会年会・第 80 回日本生化学会大会
合同大会（BMB2007）開催のお知らせ（その 3） ―― 4
■ 日本分子生物学会三菱化学奨励賞授賞式および受賞講演のご案内 ―― 7
■ 日本分子生物学会第 8 回（2008 年）春季シンポジウム ―― 7
「躍動する分子生物学―北の大地から」のご案内（予告）
■ 学会誌「GENES TO CELLS」に関するお知らせ ―― 8
■ 研究倫理委員会・若手教育ワーキンググループからのご報告 ―― 9
■ 日本分子生物学会若手教育シンポジウム ―― 10
「今こそ示そう科学者の良心―みんなで考える科学的不正問題―」
■ 学術賞、研究助成の本学会推薦について ―― 11
■ （社）新化学発展協会・平成 20 年度研究奨励金対象研究計画の
募集について ―― 12
■ 日本分子生物学会シンボルマーク（ロゴ）デザイン決定のお知らせ ―― 13
■ 学会ホームページリニューアルのご報告 ―― 13
■ 男女共同参画委員会活動報告 ―― 14
■ 会員管理システムへのアクセスのお願い ―― 16
■ 各種学術集会、シンポジウム、講習会等のお知らせ ―― 16
○第 8 回日本蛋白質科学会年会
■ 賛助会員芳名

MBSJ
特定非営利活動法人
日本分子生物学会
http://wwwsoc.nii.ac.jp/mbsj/

新会員管理システムへの移行に伴ない、新しい会員番号（数字６桁）が付与されております。５月にご案内（ログインID・パスワードの発行通知）を郵送しておりますが、会員の皆様におかれましては、必ず、学会ホームページ上の会員管理システムにアクセスいただき、登録内容などのご確認をしてくださるようお願い申し上げます！

【詳細は本文16頁にあります】

http://wwwsoc.nii.ac.jp/mbsj/

特定非営利活動法人
日本分子生物学会　事務局

〒102−0072　東京都千代田区飯田橋3−11−5
20山京ビル11階
TEL: 03−3556−9600　FAX: 03−3556−9611
E-mail: info@mbsj.jp

法人設立のご報告

特定非営利活動法人　日本分子生物学会
理事長　長田　重一

日本分子生物学会は、本年6月、所轄庁である東京都より特定非営利活動法人の認証決定を受け、設立登記を完了いたしました。2007年（平成19年）6月19日をもって法人設立となりましたので、ご報告申し上げます。

1978年に約600名の会員で発足した日本分子生物学会は、特に法的な制約を受けない任意団体として活動してきましたが、学会をとりまく制度や環境の大きな変化に対応する必要がある規模（約16,000名の会員）の学会になりました。そこで、本学会の事業内容や予算規模からみて、より適切な会計処理（本部会計と年会会計の一本化）へ切り替えるに適した特定非営利活動法人へと移行いたしました。

特定非営利活動法人は、収益事業以外について原則的に非課税とされている法人です。ただし、税制面で優遇されるだけ公益性が増し、一般会員や市民に向けた情報発信をこれまで以上に推進していく必要があります。

法律上は、特定非営利活動法人の構成員は「社員」と定義されていますが、学会活動には似つかわしくないことから、本学会の定款において「会員」として定義していますので、正会員、名誉会員、学生会員、賛助会員という会員種別に変更はありません。また、学会運営に関する重要な案件は年会期間中に開催される総会で決定されます。会員の皆様がよりアクティブに学会活動に参加されるよう願っています。

平成20年度（第30回）通常総会のご案内

平成19年11月

正会員・名誉会員　各位

特定非営利活動法人　日本分子生物学会
理事長　長田　重一

以下の要領で第30回通常総会を開催いたしますので、多くの会員のご出席をお願い申し上げます。ご存知のように、本会は特定非営利活動法人となり、重要案件は総会で決定されます。総会の成立には、正会員＋名誉会員の1/2以上の出席（委任状を含む）が必要となります。従来の総会出席者数から考えますと相当の不足が見込まれますので、会員皆様の積極的なご出席をお願いいたします。

つきましては、同封はがきにて必ずご出欠予定をお知らせください。やむを得ず、ご都合がつかない場合には、委任状（同封はがき）をご提出下さるようお願い申し上げます。

記

日　　時：平成19年12月12日㈬16：15～17：05
場　　所：パシフィコ横浜会議センター　アネックスホール2階　第18会場（F201）
予定議題：1）経過報告（理事長報告、編集報告、庶務報告、その他）
2）18年度（2006年度）決算承認の件
3）19年度（2007年度）（年度途中で法人へ移行）決算承認の件
4）20年度（2008年度）予算確認ならびに事業計画承認の件
5）その他

内田久雄先生を悼む

東京大学大学院理学系研究科長
山本　正幸
（第 13 期日本分子生物学会長）

日本分子生物学会第3期・第4期（1983～1987）の会長を務められた内田久雄先生は、本年7月2日にご逝去されました。享年 81 歳でした。ここに謹んで哀悼の意を表します。

内田先生は戦時中に東京帝国大学に入学し、1947 年 9 月に理学部化学科を卒業されて、国立予防衛生研究所に勤務されました。1954 年に東京大学伝染病研究所（現医科学研究所）の助手となられ、当時米国・英国を中心に興隆しつつあった分子生物学にいちはやく興味を持たれて 1957 年にカリフォルニア大学バークレイ校に留学されました。米国とドイツで計 4 年間分子生物学を吸収され、1961 年に帰国された後は、文字通り我が国の分子生物学のフロントランナーとして分野を牽引してこられました。1963 年に助教授、1970 年に教授に昇任されています。

先生が帰国された当時、我が国で分子生物学を志す人々にまとまった研究・教育の場はなく、様々な学部や研究所に分散して居候をしているような状況でした。そのような状況の中で、内田先生は富澤純一先生や小関治男先生とともに、ファージ講習会を開いて分子生物学の啓蒙に努められました。さらに、分子生物学研究者の研究交流の場を確保するために、先生より一まわり年長で後に初代の日本分子生物学会長となられる渡辺格先生、ほぼ同世代で後に学会長を務められる高浪満先生、関口睦夫先生、三浦謹一郎先生たち、そして惜しくも早世された岡崎令治先生らとともに「分子生物学シンポジウム」を発案され、1970 年より毎年八王子セミナーハウスなどで集会がもたれました。八王子で開催するときは内田先生が幹事役で、当時大学院生であった私を含めて研究室あげてお手伝いをいたしました。シンポジウムには当時海外から帰国して研究室を構え始めた 30 代の気鋭の研究者も加わって、熱気に富んだものでした。この分子生物学シンポジウムで啓発された若い人々が、その後我が国の分子生物学を支える中心として育っていきました。

分子生物学シンポジウムは発展的に解消し、1978 年に日本分子生物学会が設立されました。渡辺先生が第 1 期・第 2 期の会長で、内田先生はその間庶務幹事を務められました。当初 600 人でスタートした学会は分子生物学シンポジウムから引き継いだアットホームな雰囲気を保っていました。年会は毎年 12 月に設定されましたが、この決定には、他の学会で発表した内容を再度発表することを禁止する学会もあったため、年の一番後に開くことで、分子生物学会では再発表でも何でも好きに発表してよいというメッセージが込められていました。また、学会の発表者は学生でも背広にネクタイというのが常識だった時代に、分子生物学会には普段着で参加できるというイメージが定着しました。分子生物学会が右肩上がりに大きくなっていったことの主因が、生物・生命現象を論理的に理解する強力な学問として旧来の生物学、医学の諸分野に急速に浸透していった分子生物学の学問性そのものにあることは疑うべくもありませんが、こと我が国の学会の帰趨については、渡辺先生や内田先生をはじめとする創設者たちが築き上げた、学問の議論には身分や形式は関係ないという自由闊達な雰囲気が、若者を引きつける魅力となってきたことも間違いないでしょう。

いっぽう分子生物学における大きな技術革新として、遺伝子組換え技法が 70 年代後半に台頭しました。この技術の運用にはきちんとしたガイドラインが必要だということが研究者の間で合意され、米国を先頭に、様々な国がガイドライン制定に取り組みました。内田先生は早期に我が国のガイドラインを制定して研究推進を図ることが決定的に重要だとお考えになり、飯野徹雄先生たちとともに、1979 年に総理大臣決定されることとなる「組換え DNA 実験指針」の草案作成に大変ご尽力されました。

内田先生は1994年に日本学術会議の会員となられ、2000年まで二期6年を務められました。先生は分子生物学研連委員長に加え、さらに広範な生物学をカバーする生物科学研連の委員長も務められ、「分子レベルの構造生物学の推進に向けて」などの重要な報告をとりまとめておられます。先生の長年のご功績に対しては、1988年に紫綬褒章が贈られ、1996年には旭日中綬賞が叙勲されました。先生は学術会議を退職なさる頃に病を得られ、その後公の場から退かれてしまったのはまことに残念なことでした。

私が在籍した1970年代の内田先生の研究室では、DNA複製を中心に置きつつ、転写、翻訳、ファージの形態形成まで、様々な研究テーマが混在していました。先生は、まだ個人でなんとか目が行き届いた当時の分子生物学全体に興味を持ち、その該博な知識と理解力で弟子たちの相手をして下さいました。このような研究スタイルは、我が国でも岡崎先生や富澤先生が取られたような、問題に集中して最先端を切り開くタイプとは異なるものでしたが、そこで学んだ者たちには無意識のうちに大きな何かが植え付けられていたようです。先生の指導下で博士号を取ったのは10人余りと、そう多数ではありませんが、そのほとんどが大学や国立研究所で教授、准教授の職に就きました。そしていまや先生の孫弟子やひ孫弟子たちが、もはやそうした系譜を意識することもなく、活発に活動を始めています。

私が2003年に第13期の日本分子生物学会会長となったときの初仕事が米子で開かれた春季シンポジウムでのご挨拶でした。そこでは、分子生物学会が若い活力のある学会であることの例証として、歴代の会長の先生が全員健在でいらっしゃるということを申し上げました。今年になって、私たちは初代の渡辺先生、二代の内田先生を相次いで失うこととなってしまいました。それは、極めて高いエネルギーを持った火の玉が爆発し、新しいコンセプトや新しい技術が次々と形成されていった分子生物学の黎明期が再び返ってはこないということを改めて私たちに告げているかのようです。懐古でサイエンスが前進するわけではありません。しかしあの火の玉に比べると、研究条件は格段に改善されたはずの今日において研究推進策といわれるものが自ら発する光のなんと乏しいことでしょう。何かというと目的志向型のプロジェクトへと傾倒する今日、生命を本当に理解するためには何をなすべきなのか、次の時代への突破口はどこにあるのか、若い皆さんにはぜひ真剣に考えて頂きたいと思います。30年でサイズは25倍に膨れあがりましたが、分子生物学会の基盤である自由闊達さは歴代執行部によって守られてきました。分子生物学会は昔も今もそこに所属することによってほとんど何の利権も生じない学会です。内田久雄先生のご逝去を機に、自己の意志で研究を行う自由こそが内田先生や渡辺先生が私たちに遺されたものであり、次の時代のサイエンスを切り開くためのよりどころとして私たちが守っていくべきものであるという思いを新たにいたします。

第30回日本分子生物学会年会・第80回日本生化学会大会 合同大会（BMB2007）開催のお知らせ（その3）

会　　期：2007年12月11日㈫～15日㈯
会　　場：パシフィコ横浜、ヨコハマグランドインターコンチネンタルホテル
大　会　長：第30回日本分子生物学会年会　年会長　山本　雅（東京大学医科学研究所）
第80回日本生化学会大会　会　頭　清水 孝雄（東京大学大学院医学系研究科）
大会事務局連絡先：BMB2007事務局
〒532-0003 大阪市淀川区宮原4-4-63　大阪千代田ビル別館9階
Tel：06-6350-7247　Fax：06-6350-7248　E-mail：bmb2007@aeplan.co.jp
URL：http://www.aeplan.co.jp/bmb2007/

※大会開催の詳細は同封のプログラム集をご参照ください。

○プログラム

大会プログラム

特別講演
マスターズレクチャー
シンポジウム
ワークショップ
一般演題（ポスター発表、一般口頭発表、ワークショップへの採択）
フォーラム
バイオテクノロジーセミナー
男女共同参画ランチョンワークショップ「アカデミアにおいて研究者人生を楽しむ」
公開講座
懇親会
機器・試薬・書籍等附設展示会
特別企画「ナショナルバイオリソースプロジェクト（NBRP）」

日本分子生物学会関連行事および企画

総会／第5回日本分子生物学会三菱化学奨励賞授賞式・受賞講演
若手教育シンポジウム「今こそ示そう科学者の良心―みんなで考える科学的不正問題―」

○参加に関するご案内

参加手続きについて

事前参加登録受付は11月2日㈮に締め切りました。
事前参加登録をされた方は受付の必要はありませんので、11月下旬頃に講演要旨集と共に送付する参加章（名札）をご着用のうえ、そのまま会場へご入場ください。なお、参加章は、大会ホームページより事前参加登録を行い、参加費が振り込まれている方へのみお送りしております。参加費の振込みがない場合は、事前参加登録は無効になりますので、会場にてあらためて当日参加登録を行ってください。
参加章には氏名と所属を記入し、大会会場では必ずご着用ください。参加章を着用されていない方の入場は固くお断りいたします（12月15日㈯公開講座を除く）。

受付場所

会議センター2階（第1受付）および展示ホール1階（第2受付）

参加登録受付時間

	第１受付（当日登録受付・総合案内） 会議センター２階	第２受付（当日登録受付のみ） 展示ホール１階
12 月 11 日㈫	8：00 ～ 16：30	8：00 ～ 17：00
12 月 12 日㈬～ 14 日㈮	7：45 ～ 16：30	8：00 ～ 17：00
12 月 15 日㈯	7：45 ～ 11：00	——

当日参加登録費

登録種別		参 加 費	懇親会費
日本分子生物学会 もしくは 日本生化学会	正 会 員	10,000 円	10,000 円
	学生会員	7,000 円	3,000 円
非 会 員		12,000 円	10,000 円

保育室開設のご案内

会場内にベビーシッター会社への運営委託による保育室を設置いたします（有料・要事前申込）。

開設時間：12 月 11 日㈫～ 14 日㈮　8：30 ～ 18：30
12 月 15 日㈯　8：30 ～ 12：00
※昼食はご用意できませんので、原則としてお子様の昼食は一緒におとりください。

対象年齢：生後 8 週以降から 12 歳まで

委 託 先：株式会社アルファコーポレーション

保 育 料：400 円／時間（1 時間未満は切り上げ）
※保育料のお支払いは、お子様をお預けの際にお願いします。
申込みによりシッターが派遣されますので、当日のキャンセルや実際の利用時間よりも短くなった場合は、申込時の保育料のお支払いをお願いします。また、利用時間をやむを得ず延長された場合には、延長分の料金をお支払いいただきます。

申込方法：下記項目をメール本文にお書き添えの上、シッター会社（アルファ・コーポレーション）まで直接お申込み下さい。
E-mail：yoyaku@alpha-co.com
件　　名：BMB2007 保育室利用申込み
記入事項：①保護者の氏名、ご所属、連絡先（事前および当日）
②お子様の氏名、年齢、性別
③利用日時
④保育上の注意点、特記事項等
※メール送信後、アルファコーポレーションよりお申込み確認メールと共に「利用規約」「申込書」が返信されます。万一 12 月 5 日㈬までにシッター会社より返信等がない場合は、下記シッター会社宛に必ず電話でご連絡下さい。

申込締切：2007 年 12 月 3 日㈪

問 合 先：株式会社アルファ･コーポレーション
〒 106-0032 東京都港区六本木 6-2-31　六本木ヒルズノースタワー 6F
E-mail：yoyaku@alpha-co.com　Tel：03-5772-1222 Fax：03-5772-1224

そ の 他：不測の事故に対応するために、シッター会社が保険に官給しており、保険適用範囲内では補償されますが、学会および BMB2007 は、事故の責任は負わないことを申し添えます。

大会期間中の宿泊予約

本大会のオフィシャルトラベルエージェントである JTB（JTB 首都圏 法人営業埼玉支店）が参加者の皆様の宿泊予約を受け付けます。詳しくは会報 No.87 に掲載の「宿泊のご案内」または大会ホームページの「宿泊案内」をご覧下さい。

お申込み・お問い合わせは下記に直接ご連絡下さい。

株式会社 JTB 首都圏　法人営業埼玉支店　大会イベント課　BMB2007 デスク
〒 330-0845 埼玉県さいたま市大宮区仲町 2-75　大宮フコク生命ビル 7 階
Tel：048-644-5313（9：30 ～ 17：30 土日祝を除く）
Fax：048-649-0746
E-mail：bmb2007-travel@jtb.jp

日本分子生物学会三菱化学奨励賞授賞式および受賞講演のご案内

「平成19年度日本分子生物学会三菱化学奨励賞」の授賞式および受賞講演を下記の要領により開催いたします。

【授賞式および受賞講演】

日　時：2007年12月12日㈬　17：05～18：15

場　所：パシフィコ横浜会議センター
　　アネックスホール2階　第18会場（F201）

【第5回日本分子生物学会三菱化学奨励賞　受賞者】

福田　光則（東北大学大学院生命科学研究科　教授）
低分子量Gタンパク質Rab27Aによる膜輸送制御の分子基盤の解明
Studies on the role of small GTPase Rab27A in membrane traffic

吉田　清嗣（東京医科歯科大学難治疾患研究所　准教授）
DNA傷害における細胞内シグナル伝達機構とアポトーシス誘導メカニズム
Molecular mechanisms for regulation of DNA damage-induced apoptotic cell death

日本分子生物学会第8回（2008年）春季シンポジウムのご案内（予告）

第8回春季期シンポジウム「躍動する分子生物学―北の大地から」を、2008年5月26－27日の二日間、札幌（ロイトン札幌）にて開催いたします。本シンポジウムでは、日本発の最近の優れた分子生物学研究を幅広く集め、ホットでエキサイティングな講演をしていただきます。世界をリードする研究とは何なのか。他の研究とは質的にどこが異なるのか。是非、貴方なりの答えを探してみてください。札幌の5月は清々しい季節です。全国からの多くの若手研究者、学生の皆様の参加を期待しています。なお、前日の5月25日㈰には分子生物学の楽しさ、素晴らしさを一般の方々に知ってもらう市民公開セミナーを開催する予定です。

日本分子生物学会第8回春季シンポジウム
（The 8th MBSJ Spring Symposium）
「躍動する分子生物学―北の大地から」
【会期】　2008年5月26日㈪～27日㈫
【会場】　ロイトン札幌（札幌市中央区北1条西11丁目）

2008年度春季シンポジウム世話人
北海道大学遺伝子病制御研究所分子腫瘍分野
畠山　昌則
札幌市北区北15条西7丁目
TEL：011-706-5527
FAX：011-706-7544
e-mail：mhata@igm.hokudai.ac.jp

学会誌『GENES TO CELLS』に関するお知らせ

編集幹事　上村　匡

日本分子生物学会の学会誌である『GENES TO CELLS』は、生命科学の分野において国際的に高い評価を得ている英文ジャーナルです。日本分子生物学会の会員には次のような特典がありますので、皆様の研究に存分に活用していただけるよう、下記のとおりお知らせ申し上げます。

【電子版へのフリーアクセスについて】

賛助会員を除くすべての会員は、『GENES TO CELLS』の電子版へフリーでアクセスすることができます。創刊号から最新号まで、自宅からでもフルテキストでのダウンロードが可能です。初回の登録手続きを済ませれば、以後はユーザーネームとパスワードのみでアクセスできますので、学会ホームページのオンライン手続きページを参考に是非ご登録ください。

http://wwwsoc.nii.ac.jp/mbsj/gtc/index.html

※　ユーザーネーム（会員番号）がわからない方は学会事務局へお問い合わせください。

【冊子版の会員特別価格購読について】

すべての会員は、『GENES TO CELLS』の冊子版を会員特別価格で購読することができます。非会員向けの一般価格よりかなり安く購読できますので、この機会にふるってお申し込みください。クレジットカードでのお支払いができるようになりました。

※　個人価格　16,500円／年（正会員と学生会員が対象）
　　機関価格　35,000円／年（賛助会員のみが対象）

2008年の購読申し込みは、学会ホームページから申込書をダウンロードし、必要事項を記入のうえ学会事務局へお送りください。サンプルのご依頼にも対応いたします。

2007年も購読していただいている方には、継続専用（記入が簡単）の申込書を別途お送りしましたので、そちらをご利用のうえ学会事務局へお送りください。

【本件に関するお問い合わせ先】

特定非営利活動法人　日本分子生物学会　事務局
〒102-0072　東京都千代田区飯田橋3-11-5
　　20山京ビル11階
TEL. 03-3556-9600　FAX. 03-3556-9611

『研究倫理委員会・若手教育ワーキンググループからのご報告』

昨今相次いで報道されているように、国内外で専門分野を問わず、科学的不正が頻発しており、社会的な関心の高まりも相まって、われわれ科学者には「自浄作用」を持つコミュニティの確立が求められている。科学的不正を防止するためには、過去の事例の検証と共に将来へ向けた具体的方策が必要であるし（過去と将来）、また別の視点から言えば、不正に対する処罰と共にそれを予防するための具体的方策も必要である（罰則と予防）。過去事例検証や罰則の策定は具体的でかつ即効的な作用を期待できるが、一方で将来に向けた予防的な方策はともすれば曖昧で抽象的な議論に陥りやすく、また慢性的な体質改善のように息の長い取り組みが必要とされる点で困難を伴う。

分子生物学会・研究倫理委員会では、これらの問題に対応するために、下部組織として論文調査ワーキンググループ（以下 WG）と若手教育 WG の二つの WG を設置した。特に若手教育 WG には、若手科学者の教育という観点から、将来に向けた研究倫理観の醸成を目指す方策を提案することを目的とした。これらは長期間にわたる取り組みになることが予想されるため、WG 委員は 30 ～ 40 歳代の研究者に委嘱することにし、加藤茂明（東大・分生研）、水島昇（医歯大・医）、山中伸弥（京大・再生研）、上田泰己（理研･CDB）、高橋考太（久留米大･分生研）、中山敬一（九大・生医研：座長）を選任した。WG では集中的な議論を重ね、このたび第一次の最終答申「科学的不正を防止するための若手教育への方策について」を研究倫理委員会に提出した。ここではその抜粋をご紹介したい。（文責：中山　敬一）

1．若手教育における現状と問題点

（1）生物学研究の持つ体質の問題

生物学的な研究手法では一般的にノイズやブレが発生しやすく、研究者の方にもある程度の間違いを許容するような体質が生まれてしまっている。この雰囲気の中で、無知から来る偽造や間違いを装った偽造などが横行するようになり、ついには捏造に発展する構造的な体質が築かれてしまっている。

（2）統一的な教育やルール作りおよび啓発活動の欠如

現状では、初学者、特に大学院生の教育は個々の研究室によってさまざまであり、科学的不正を防止するような統一的な教育はなされておらず、啓発もほとんどされていない。ルールがまちまちで徹底しておらず、無知から間違いが発生する土壌があり、これが最終的に科学的不正を生む温床となっている。

（3）PI 教育の欠如と責任体制の不統一

研究室主宰者（以下 PI）は組織的な教育を受けておらず、自分の出身研究室における経験のみに拠っているため、前項で指摘したルールの多様性が解消されない。さらに論文や研究室の体制に対してどのような責任を有するのかという点に関しても、価値観がまちまちであり、それが科学的不正を助長する原因となっている。

（4）自浄作用をもつ組織的な調査体制の未整備

問題事例が発生した時点における対応に全く統一性が無く、場当たり的である。所属機関、学会、所轄官庁、学術会議等のコミュニティ、等の役割が明白ではなく、統一したルールがないばかりか、処罰に対しても個々の事例で全く異なり、不公平感や不明瞭性を醸成している。

（5）体質改善に対する責任の不明確性

このように抜本的な体質改善の必要性が明白であるにも関わらず、その指導的役割が不明瞭で、誰も責任を持って取り組もうとしていない。

2．若手教育における方策（総論）

（1）目的

若手教育の目的が若手研究者の研究倫理観醸成にあることは論を俟たないが、もう一つ重要な目的は、科学者が自浄作用の構築へ向けた努力姿勢を一般社会に示すことである。

（2）教育対象

大学院生にある程度の統一性を持った研究倫理観を持たせるためには、一般的な周知・啓発活動が必要であるが、大学院生の問題は多くの部分が所属する研究室に帰することを考えれば、PI の教育も同様に重要である。

（3）教育手段

研究倫理観の醸成と自浄作用確立のデモンストレーションの手段としては周知・啓発活動が中心となるが、このような活動の要点はできるだけ対象者の興味を惹くことであり、分子生物学会年会･学会広報誌･大小メディア・WEB 等を駆使して活動を展開していく。

3．具体的な活動案について

（1）短期的（1 年以内）な具体的方策について

年会におけるシンポジウムを中心として、その前後に「細胞工学」誌上にて座談会や学会探訪記事を行う「三段階方式」で、多くの若手研究者に研究倫理問題に対して関心を持たせ、啓発を図る。

● 第一弾：「細胞工学」誌上座談会「メイキング・オブ・分生若手教育シンポジウム」

若手教育 WG 6 名（加藤・水島・山中・上田・高橋・

中山）による仮想座談会形式にて研究倫理に関する問題や若手教育に対する問題を提起する。掲載誌は12月の年会前（11月末）に発行予定。これによって、若手PI達が真剣にこの問題について取り組んでいる姿勢を打ち出すと共に、年会におけるシンポジウムの宣伝を兼ねる。

● 第二弾：年会・分生若手教育シンポジウム『今こそ示そう科学者の良心―みんなで考える科学的不正問題』

3名の講演とパネルディスカッション。計120分の予定。講演者は科学者・行政・マスコミから一名ずつ。パネルディスカッションはWGの6名で分生の将来と若手の教育について、相互および会場と意見を交換する。詳細についてはこの記事の最後に掲載。

● 第三弾：「細胞工学」誌学会探訪記事「分生若手教育シンポジウムに参加して」

若手研究者に依頼して、シンポジウムに参加した感想を書いてもらい、細胞工学に記事として掲載してもらう。

(2) 長期的な具体的方策について

若手教育のような問題は本質的に長期的な取り組みが必要である。

● 長期的に責任を持つ体制の構築

本WGを常任組織とし、現WG委員を2～3年留任させて、長期的に取り組む体制を構築する。

● 定期的なシンポジウムの開催

定期的なシンポジウムの開催が必要であるが、なるべく多くの学会員への周知・啓発を図るためにはどうしても年会に併せてシンポジウムを計画する必要がある。次年度以降のシンポジウムの内容に関しては未定であるが、今年の開催を一つの叩き台にして反省点を洗い出し、その上で次年度のプランを立てたい。

● 研究倫理ガイドラインの作成とWEB上での公開

本WGにおける議論では、科学的不正の温床に具体的なルールの不徹底が大きな要因となっていることが指摘された。この問題に対処するため、具体的な問題を提起し、その原理と対応を示すWEBサイトを作成する。

● WEB掲示板による公開記名ディスカッション

本来科学的倫理観は、上から押し付けるものではなく、全体として醸成すべきものであるから、立場や経験を超えて広く意見を募り、時に議論しながら、コンセンサスを形成すべきである。そこでいくつかのテーマに対してWEB掲示板によるディスカッションを行いたい。

● 事例研究の必要性

過去の事例をタブー化せず、それに学ぶ姿勢は、再発防止のために必要である。WEB等で事例を報告し、原因・遠因、それに対する対応の経緯、最終的な処分等を公開する。

● 大小メディアによる報道の利用

本学会員だけでなく、広く一般市民にわれわれの姿勢を知ってもらうために、大小メディアによる報道を積極的に利用するよう心がける。

※今年の年会におけるシンポジウム（平成19年12月13日）には多くの方のご参加をお願い申し上げます。同時に行われるパネルディスカッションでは会場にもマイクを用意しますので、皆様のご忌憚ないご意見をお待ちしております。

日本分子生物学会　若手教育シンポジウム
『今こそ示そう科学者の良心―みんなで考える科学的不正問題―』

●日　時：　2007年12月13日㈭17：15～19：15
●場　所：　パシフィコ横浜・会議センター　5階501（第15会場）

座長　山中　伸弥（京都大学）、中山　敬一（九州大学）

第1部　講演会（17：15～18：30）
演者
1）研究者の立場から：　柳田　充弘（京都大学）
2）行政の立場から：　菱山　豊　（文部科学省）
3）マスコミの立場から：村松　秀　（NHK）

第2部　パネルディスカッション（18：30～19：15）
若手教育ワーキンググループ委員：加藤　茂明（東京大学）、水島　昇（東京医科歯科大学）、山中　伸弥（京都大学）、上田　泰己（理化学研究所）、高橋　考太（久留米大学）、中山　敬一（九州大学）および会場の皆様

学術賞、研究助成の本学会推薦について

本学会に推薦依頼あるいは案内のある学術賞、研究助成は、会報 No.87（6 月号）に一覧として掲載しております。そのうち、応募にあたり学会等の推薦が必要なものについての本学会からの推薦は、本学会研究助成選考委員会または賞推薦委員会の審査に従って行います。応募希望の方は、直接助成先に問合わせ、申請書類を各自お取寄せのうえ、ふるってご応募下さい。

本学会への推薦依頼の手続きは次の通りです。

1. 提出物
   1) 本申請に必要な書類（オリジナルおよび募集要項に記載されている部数のコピー）
   2) 本学会の選考委員用および学会用控に、上記申請書類のコピー計 6 部（論文は不要）
   3) 申込受付確認のための返信封筒（返信用の宛名を記入しておいて下さい）

2. 提出先

※賞推薦についての送付先

日本分子生物学会　賞推薦委員長　石川 冬木
〒 606-8501　京都市左京区吉田近衛町　医学・生命科学総合研究棟 405 号
京都大学大学院生命科学研究科　細胞周期学分野
FAX：(075) 753-4197

※ 研究助成についての送付先

日本分子生物学会　研究助成選考委員長　花岡 文雄
〒 565-0871　吹田市山田丘 1-3
大阪大学大学院生命機能研究科　時空生物学講座
FAX：(06) 6877-9382

3. 提出期限

財団等の締切りの 1 カ月前まで。提出期限後に受取った場合や、提出書類が不備な場合は、選考の対象にならないことがあります。

（社）新化学発展協会・平成 20 年度研究奨励金対象研究計画の募集について

（社）新化学発展協会では、基礎研究の推進と研究者の育成を通じて新化学の発展を図ることを目的に、新化学の発展に資する若手研究者の研究に対して、下記に従って研究奨励金を贈呈いたします。応募される方は、下記の研究課題の中から１つを選び、研究計画を作成し協会事務局まで提出して下さい。必要資料は、協会ホームページから入手できます。

1. 研究課題

課題１：　再生可能資源（バイオマス）からの体系的な化学品製造を可能とするプロセスの高度化に関する研究

課題 1−1　化学触媒プロセスに関する研究

課題 1−2　バイオプロセスに関する研究

課題２：　分子力場計算の高速化・効率化に関する研究

課題３：　環境、エネルギー分野における新素材・新部材創製と新機能創出に関する研究

課題４：　賢−マテリアル実現のための基礎的・基盤的開発研究

課題５：　電子情報分野において、有機合成技術やバイオ技術または自己組織化を利用した構造の構築により、デバイスにおける新たな機能発現や作製方法の提案を目指した研究

課題６：　MEMS 分野における新たな機能を有する材料研究または新たな機能を発現するデバイスの研究

課題７：　生体分子を新規な機能性材料として実用化することを目指した研究

2. 応募資格

大学またはこれに準ずる研究機関において研究活動に従事する者であって、39 歳以下（昭和 43 年（1968 年）4 月 1 日以降に出生）の者

3. 応募締切

平成 20 年 1 月 31 日㈭必着。

4. 件数および金額

原則として各課題につき 1 件とし、1 件につき 100 万円を贈呈する。

5. 選考

有識者を含む協会の審査委員会にて審査、決定する。

なお、選考の結果は平成 20 年 5 月下旬までに公表すると共に、選出された各人に通知する。

6. 問い合わせ先

社団法人　新化学発展協会　研究奨励金係
TEL：03-5297-8820　FAX：03-5297-8821
E-mail：aspronc@aspronc.org
URL：http://www.aspronc.org/

日本分子生物学会シンボルマーク（ロゴ）デザイン決定のお知らせ

第 15 期理事長　長田　重一
庶務幹事　永田　恭介
広報幹事　加藤　茂明

前号の会報およびホームページにて公募していたシンボルマーク（ロゴ）デザインには、総計 111 におよぶ多数の作品をご応募いただきました。学会執行部による厳正な選考の結果、出村浩之氏による下記のデザインを採用することに決定いたしました。本デザインは、今後会報などの印刷物やホームページに掲載させていただきます。
※会報の表紙にはオリジナルカラーで掲載しています。

＜選考委員＞
理 事 長　長田　重一
副理事長　岡田　清孝
副理事長　宮園　浩平
庶務幹事　永田　恭介
広報幹事　加藤　茂明

＜作者略歴＞
出村　浩之（でむら　ひろゆき）
1960 年北海道生まれ。
美術専門学校を卒業後、広告制作会社勤務を経てデザインオフィスを設立。雑誌広告をはじめ、パンフレットやフリーペーパー、ロゴ等のデザイン制作に従事。「佐呂間町開基 100 年記念シンボルマーク（優秀賞）」や「尾瀬国立公園ロゴマーク（佳作）」など、地元北海道を中心にグラフィックデザイナーとして活動している。

＜作品説明＞
コンセプトは様々な組み合わせから成る分子構造をモチーフにデザインしました。5 つの球体の全体構造を Molecular（分子）の頭文字である M に。その中の 2 つの赤い球体は生命の躍動感と Biology（生物学）の頭文字である B に見立てて組み合わせています。また、前面に配置された赤は日本を想起させます。

MBSJ

学会ホームページリニューアルのご報告

庶務幹事　永田　恭介

このたび、前役員会からの懸案事項でありましたホームページ（下記 URL）のリニューアル作業が終了しましたのでご報告いたします。

今回のリニューアルでは、見やすく、必要な情報を探しやすいページ作りを心がけ、アクセスされる会員の皆様にとって使いやすいホームページとなるように改善を加えました。

今後数ヶ月をかけて、現状のサイトの上位階層より順次全ページに対応できるように改善を継続し、サイト全体の使い勝手をさらに向上していきます。

また、分子生物学の発展という公益の観点からも、積極的な一般市民向けの情報発信も行っていく予定です。

ご意見がありましたら、学会事務局までお問い合わせください。

特定非営利活動法人　日本分子生物学会
URL　http://wwwsoc.nii.ac.jp/mbsj/

【本件に関するお問い合わせ先】
特定非営利活動法人　日本分子生物学会　事務局
TEL：03-3556-9600　FAX：03-3556-9611
E-mail：info@mbsj.jp

男女共同参画委員会活動報告

1. 日本学術振興会・特別研究員−RPD 制度に関する要望書の提出

平成 18 年 7 月 31 日から 8 月 16 日にかけて、「日本学術振興会･特別研究員−RPD 制度に関する WEB アンケート」を行いました。平成 18 年度からスタートした本制度をより有効なものにするため、現場の声を集めることを目的としたものです。このアンケートの結果から、制度の継続と採用枠の拡大、研究期間の延長、周知徹底、応募資格条件の緩和、勤務形態の選択化、子育て支援制度の充実、介護復帰への制度の拡大といった内容を、要望書として取りまとめました。本年 5 月 17 日に日本学術振興会の久保真季総務部長、6 月 8 日に内閣府男女共同参画局の板東久美子局長、6 月 21 日に文部科学省科学技術･学術政策局の森口泰孝局長と要望書の手交を行いましたので、ご報告いたします。

なお、要望書の詳細は本会ホームページに掲載しています。
＜http://wwwsoc.nii.ac.jp/mbsj/kyodosankaku/pdf/rpd_enq_200708_rqst.pdf＞

2. 女子高校生夏の学校 ～科学・技術者のたまごたちへ～

今年で 3 回目となる「女子高校生夏の学校」（主催：男女共同参画学協会連絡会）が 8 月 16 日～ 18 日に国立女性教育会館で開催されました。総参加数は 110 名、総スタッフは延べ 130 名となり、開会式には日本学術会議より毛利衛氏、二日目には郷通子氏（お茶の水女子大学学長・総合科学技術会議委員）にご参加、ご講演いただきました。今年の企画のポイントとして、一つ目に、実験・実習を充実し、学協会の協力により 11 実験・実習が実施され、高校生も複数の実験を経験することができました。本学会からは「イネの DNA に刻まれた『お米』のふるさとを読み解こう」というテーマで、東京大学・静岡大学が共同で実験コースを提供し、好評を博しました。二つ目に、高校生と専門家の交流を促進するため、高校生を 20 グループに分け、各グループに複数の学生チューターが全日程付き添い、さらに専門家 2 名が担任としてつきました。また、開校中に「大人のためのサイエンス･ディナー」という新企画が設けられ、引率教員･保護者・実験講師・講演講師・実行委員等が夕食をとりながらの交流会を行いました。3 日間に渡り多彩な企画を行い、盛況のうちに幕を閉じました。

本学会も後援団体となり､実験とポスター展示を行い、会員の福田公子氏、大坪久子氏、土本卓氏、本橋令子氏が運営スタッフとして参加しました。

なお、女子高校生夏の学校「実施速報」は国立女性教育会館のホームページでご覧になれます。
＜http://www.nwec.jp/jp/program/invite/2007/page12s.html＞

3. 第 2 回 科学技術系専門職の男女共同参画実態調査

平成 19 年 8 月 21 日～ 10 月 31 日にかけて、標題の第 2 回大規模アンケート調査が実施されました。前回、2003 年に実施した第 1 回大規模アンケート調査では、2 万人にのぼる科学者・技術者の現状と課題を抽出し、提言としてまとめることで、行政各機関への働きかけを行いました。その結果､いくつかの新たな施策が実施され、社会は変革の方向へ動き出しています。継続的に取り組む必要のある課題に関する実態や意識の変化、更には、社会問題となりつつあるポスドクに関する調査を行うことを目的に、第 2 回目の大規模アンケート調査を実施することになりました。今回の調査では、第 1 回目の設問項目を踏襲しつつも、特に、増加の一途をたどっているポスドクなど任期付き職や少子化（子育て支援）に関する設問を大幅に追加いたしました。

回答にご参加いただいた会員の方々にお礼申し上げるとともに、今回参加できなかった方々は、次回実施の際にご協力くださるようお願い申し上げます。

今後､男女共同参画学協会連絡会が中心となって､データ集計・考察を行い、報告書にとりまとめる予定となっております。また、本会会員のデータの解析も行う予定です。解析結果は、随時学会ホームページに掲載する予定ですので、ご参照の程お願いいたします。

4. 第 5 回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム

10 月 5 日に、名古屋大学野依記念学術交流館にて男女共同参画学協会連絡会主催のシンポジウムが行われました。テーマを「真の男女共同参画へ向けて意識を変えよう！」とし、3 つの分科会、ポスター展示、日本 IBM 技術顧問の内永ゆか子氏による特別講演「科学技術分野におけるダイバーシティーの考え方」、パネル討論等が行われましたので、ご報告いたします。

5. BMB2007 男女共同参画ランチョンワークショップ開催のお知らせ

12 月 11 日～ 15 日に開催される BMB2007 の会期中に、男女共同参画企画によるワークショップが行われます。お昼の時間帯のため、お弁当を用意してお待ちしておりますので、ぜひ皆様お誘い合わせの上ご参加ください。

企画：『アカデミアにおいて研究者人生を楽しむ』

日時：12 月 12 日㈬ 12：15 ～ 13：15
会場：パシフィコ横浜　第 4 会場
（会議センター 3 階 303）
趣旨：「男女共同参画事業」が時代の追い風にのってさまざまな取り組みがなされるなか、各学協会においても相互に連携し、それぞれ特色ある施策を議論しつつあります。本ワークショップでは、第 1 部で 5 名の先生方のご講演を予定（演者として、菅裕明、有賀早苗、小林和人、北爪しのぶ、高橋淑子の各先生）、第 2 部ではパネルディスカッションを行います。本ワークショップは多様なキャリアパスを男女ともに再考する機会として、今後の男女共同参画のあり方を議論するとともに、参加者には明るい未来への希望を抱いてもらう場といたしました。

会期中には、文部科学省・女性研究者支援モデル事業採択 20 大学・機関及び公私の助成機関・財団による関連するポスター展示も実施いたします。

日時：12 月 11 日～ 14 日（ディスカッション・コアタイム 12 日 14：00 ～ 14：30）
会場：パシフィコ横浜　ポスター展示会場
（展示ホール 1 階）

会員管理システムへのアクセスのお願い

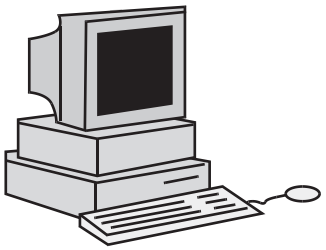
本学会では、会員の皆様の利便性を向上させるため、本年5月から学会ホームページ上に会員管理システムを設置しております。このシステムを利用することで、学会活動に必要な登録情報の確認や変更手続き、会費納入状況の確認などができます。また、他の会員の検索や登録情報を閲覧できる会員名簿としての機能もあり、会員同士の交流にご利用いただけるようになっております。

9月に会員の皆様へメール配信にてご案内させていただき、その後数百名のアクセスを確認いたしました。しかしながら、9月末現在で全会員数の15%程度のアクセス率であり、依然として会員名簿の機能が十分に活かされているとは言えない状態が続いています。繰り返しになりますが、今後、冊子版会員名簿の作成予定はございませんので、早いうちにシステムへアクセスし、会員名簿としての機能を活用できるようにデータの設定をしていただきますようお願いいたします。

手順としては、システム画面の「公開情報の設定」をお選びいただき、公開可能な項目をご自身で設定していただくようになっております。初期設定での公開対象項目は、お名前・会員種別・会員番号だけですので、所属機関で検索される場合、検索の対象外となってしまいます。閲覧できるのは会員の方のみであることを踏まえて、公開とする項目をご検討ください。

また、個人情報を守るため、書面でご連絡した仮パスワードからご自身が決めた任意のパスワードへの変更もしていただきますよう、重ねてお願い申し上げます。

会員管理システムURL
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/mbsj/membership/index.html>



各種学術集会、シンポジウム、講習会等のお知らせ

○第8回日本蛋白質科学会年会

会　期：平成20年6月10日㈫～12日㈭
会　場：タワーホール船堀（電車利用で東京駅から20分、新宿駅から30分です）
大会長：田中 啓二（東京都臨床医学総合研究所）

プログラム：
詳細は決定次第、大会ホームページ（http://www.aeplan.co.jp/pssj2008/）に掲載いたします

演題募集時期：
2008年2月20日㈬～3月18日㈫（予定）

事前参加募集時期：
2008年2月20日㈬～4月15日㈫（予定）
（申込は大会ホームページ上にて行います）

お問い合わせ先：
第8回日本蛋白質科学会年会事務局
〒532-0003 大阪市淀川区宮原4-4-63
新大阪千代田ビル別館9階
㈱エー・イー企画大阪オフィス内）
大会ホームページURL：
http://www.aeplan.co.jp/pssj2008/
E-mail：pssj2008@aeplan.co.jp
Tel：06-6350-7163　Fax：06-6350-7164

日本分子生物学会　賛助会員一覧

（2007 年 10 月 1 日現在）

アサヒビール株式会社 R&D 本部未来技術研究所
アジレント・テクノロジー株式会社
アトー株式会社 営業開発グループ
アプライドバイオシステムズジャパン株式会社
株式会社アムコ 販売企画部
アムジェン株式会社 臨床開発部
株式会社エー・イー企画
海洋研究開発機構 図書室
科学技術振興機構 研究基盤情報部バイオインフォマティクス課
科研製薬株式会社 研究開発本部総合研究所
協和発酵工業株式会社 バイオフロンティア研究所
株式会社コクサン
コスモ・バイオ株式会社 開発部
産業技術総合研究所 北海道センター図書室
ジャスコインタナショナル株式会社 第二事業部営業課
住友化学株式会社 農業化学品研究所探索生物グループアグリバイオ
生化学工業株式会社 機能化学品営業部原体・試薬ビジネスユニット
第一化学薬品株式会 社試薬統括部テクノサポートセンター学術グループ
第一三共株式会社 創薬基盤研究所
タカラバイオ株式会社 バイオインダストリー部
田辺三菱製薬株式会社 研究本部研究推進部加島推進グループ
中央精機株式会社
東洋紡績株式会社 ライフサイエンス事業部
株式会社トミー精工
ナカライテスク株式会社 技術営業部広報課
日本ベクトン・ディッキンソン株式会社 BD サイエンス
日本たばこ産業株式会社 たばこ中央研究所
日本たばこ産業株式会社 植物イノベーションセンター
日本甜菜製糖株式会社 総合研究所第二グループ微生物
浜松ホトニクス株式会社 システム事業部特機営業部
ヒゲタ醤油株式会社 研究開発部
富士写真フイルム株式会社 インフォメーション事業本部ライフサイエンス
富士レビオ株式会社 研究開発部門研究支援グループ
フナコシ株式会社
三菱化学株式会社 イノベーションセンター
ヤマサ醤油株式会社 R&D 管理室
ロシュ・ダイアグノスティックス株式会社 AS 事業部
湧永製薬株式会社 湧永満之記念図書館
和研薬株式会社

＜ 50 音順＞

The Molecular Biology Society of Japan NEWS

日本分子生物学会 会報

（年3回刊行）

第 88 号（2007年11月）

発　行――特定非営利活動法人　日本分子生物学会

代表者――長田　重一